

# みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Ulos : Traditional Weavings of the Toba Batak

|       |                                                                                                    |
|-------|----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2010-02-16<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 吉田, 集而<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.15021/00004629">https://doi.org/10.15021/00004629</a>                  |



写真12 バタック族の男の正装。頭に tari-tari を、肩に hadang を、そして腰に marabit をつけている。



写真13 葬式でおどるバタック族の女。肩に hadang を、頭に hohop をつけている。

女性の場合、胸部でウロスがまきつけられる。これを hohop という。肩には男性の場合と同様に hadang が右肩にかけられる。男性の背広に対応して、インドネシアで広く用いられている kebaya とよばれる服をつけ、その上に、スマトラで多くみられる、薄手の布でつくられたひざのあたりまである長い kebaya panjang とよばれる上衣をまとう。このとき、下は普通のサロンをまとう。この

上に hadang、および hohop をつける。

ウロスを両肩にかけて着るつけ方がある。これを marulos という。ウロスをまとう本来の形である。さらに、頭からすっぽりとかぶることがある。これを martujung-tujung という。また、女性に特有のものであるが、時にウロスをたすきがけにして、その中に乳児あるいは幼児を入れてつれあるくことがある。これを parompa という。

これらのウロスの着つけ方は、儀礼のいろいろな部分にみられるものである。頻度としては, marabit, hadang, hohop などの使い方が非常に高い。

## 2. ウロスの用い方のマナー

ウロスが用いられる儀礼にはいろいろのものがあるが、大きく3つに分けることができるであろう。

最大の儀礼は氏族 (marga) の記念碑 (tugu) が建設されるときにみられる。このとき、全氏族が集合し、盛大な祭が催されるという。しかし、tugu の建設は、きわめてまれなものであり、ほとんどみることはいできない。一般にウロスが多用されるのは結婚式と葬式においてである。子供の命名式のような儀礼は小さい祭として、参加者のウロスの着用は必要はない。ただし、子供を生んだ女にウロスがおくられるなどの儀礼はある。

### 1) 結婚式の場合

新郎は ragi pakko を marabit として着用し、hadang に sirara, 新婦は hohop に ragi uluan, hadang に sirara をつける。新郎新婦のそれぞれの両親は、理想的には marabit あるいは hohop に runjat, hadang に sibolang が用いられる。そして、新郎新婦の父方の祖父母 (ompung) は、男は marabit に punca, hadang に ragi uluan, 女は hohop に ragi idup, hadang に ragi uluan をつける。新郎新婦の saompu (祖父を同じくする親族) は彼らの両親と同じウロスをつけることが望まれる。

ここに述べたウロスの着用の仕方は、理想の場合であり、実際にはいろいろの変異がある。一般に、バタック族の人々が所有しているウロスは, punca, runjat, ragi idup のような順位の高いウロスを含まないことが少なくない。実際に所有されているウロスの実数調査はきわめてむずかしく、正確にはほとんどわからない。しかし、どの家においても最底もっていなければならないウロスがあり、sirara はその第一番のものである。sibolang, sitolutuho, ragi pakko, ragi uluan などは、sirara と同様にもっていなければならないウロスであると考えられている。一般に、彼らは、15~25枚程度のウロスをもっており、多くは, raja ni ulos に含まれない下級のウロスである。そのため、理想的な形でウロスの着用はむしろまれである。その場合、つぎのような一般的原則で処理される。

- a) 老人は若者よりも良いウロス (順位の高いウロス) を着用する。
- b) 同じ順位のウロスがないときは男は女よりも良いウロスを着用する。
- c) marabit は hadang よりもよいウロスを着用する。(女の場合は、hohop は hadang よりも良いウロスを着用する。)

先の理想的なウロスの着用の例では、新郎新婦の marabit および hohop が hadang よりも低い点だが、c) の原則に反した例外である。

結婚式には、ウロスを用いる儀礼が含まれている。tulang (新郎の母方の兄弟)<sup>1)</sup>が pinal lobu-lobu (別名, magiring

1) バタック族では、母方交叉イトコ婚がみかけの親族組織の原則である。そのため、新郎の母方の兄弟と新婦の父およびその兄弟は一致する。しかし、現実には母方交叉イトコ婚の頻度はきわめて低いため、一致しない場合の方が多い。そのときは、新婦の父の兄弟の最年長者がこの儀礼を行なう。

parompa という) を、「金持になりますように、子供がたくさんできますように」ととなえながら、新郎新婦の 2 人の肩にかけてやる。これは、hula-hula (自己の氏族に嫁を与えてくれる氏族) の新郎新婦への祝福の儀礼である。

## 2) 葬式の場合

結婚していない人や子供しかまだいない人が死んだときの葬式は、小さな祭と考えられており、ここでは重要でない。孫をもつ人が死んだとき以上の場合に正式の葬式が行なわれる。

さて、故人は、ウロスにつつまれて棺におさめられる。その際、遺言により故人によってウロスの種類や数が推定されているときはそのように行なうが、一般に 1 枚の順位の高いウロス—多くの場合 sirara が用いられるが一で故人をつつむ。男の場合、ragi pakko が用いられることも少くない。特に故人が愛用していたウロスであれば、それでもよいという。

棺の上にも、ウロスがかけられる。こ

の場合も sirara がもっとも一般的である。

さて、故人の夫あるいは妻は、ウロスを頭からかぶり (martujung-tujung), 式に参列する。その際、ragi pakko が用いられるが、ragi idup でもよいとされている。故人の直系の子供は肩にウロスをかけ (marulos), すわったままで参列する。用いられるウロスは同じく ragi pakko である。これらの人々は、葬儀の際の踊りには参加しない。直系の孫達は、martujung-tujung や marulos をする必要はなく、踊りに参加する。なお、踊りに参加する人々は、tari-tari をつける。

故人の氏族の saompu 内の人々は、それに対応する hula-hula の人々とともに、すべて同等のウロスが着用される。すなわち、marabit あるいは hohop に runjat, hadang に sibolang を着用する。そして彼らも踊りに参加するが、hula-hula 側では男のみが踊りに参加でき、女は参加できない。また、hula-hula



写真14 棺の上にウロス (sirara) がかぶせられている。

と自己の氏族の構成員がまじって踊られることもない。

祖々父 (among tua) を同じくする親族、および、boru (嫁をあたえる氏族) 側の親族も参加するが、共食はしても踊りには参加しない。彼らの着用するウロスは raja ni ulos 以外の下級品である。さらに略式になると、下は普通のサロンで、ウロスの hadang をしている場合もある。

参列者のウロスの着用をみると、ompung の位置はきわめて高いことがわかる。しかも、saompu 内では、同等のウロスの着用が考えられており、バタック族社会での ompung、および、saompu の重要さがわかる。また、結婚式においても、葬儀においても、自己の hula-hula とのきわめて強い結びつきがみられる。いずれの式においても、自己の boru の助力なしには式が成立しないにもかかわらず、boru はほとんど無視されているといっているであろう。

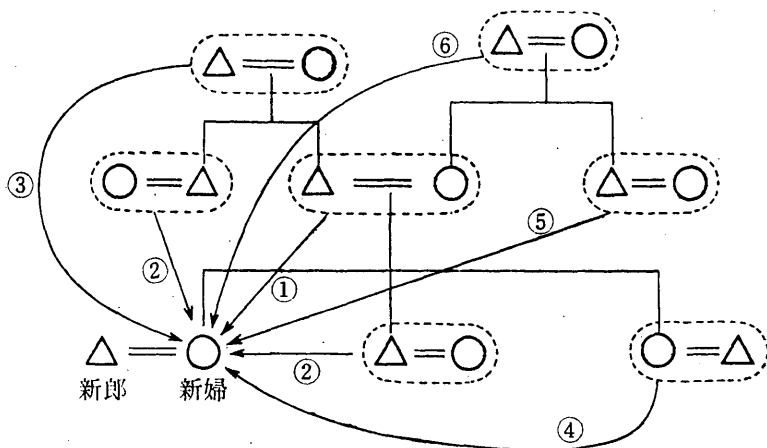
## V. ウロスの贈与

ウロスは贈物として重要なものである。ウロスが贈与される場合は、つぎの3つの場合である。(1)結婚したとき。多くのウロスがこのとき移動する。(2)両親ともに死んだとき。(3)その他、子供が生まれたときや、婚入した娘が病気になったり、遠くに旅行にでかけるときなどである。

結婚に際して、新郎は両親から結婚式に身につけるウロスをもらうことが多い。しかし、それよりも新婦におくられるウロスが重要である。新婦はいろいろの人々からウロスをうけとる。もっとも良いウロスは、①彼女の両親からおくられる。両親について良いウロスは②彼女の父方の兄弟、および彼女の兄弟からおくられる。さらに、③父方の祖父、④彼女の姉妹、⑤母方の兄弟、⑥母方の祖父の順に、良いウロスが彼女におくられることが期待される。

新郎におくられるウロスを別にとすると、

表1 新婦におくられるウロス



数字の若いほど、良いウロスがおくられることを期待されている。

結婚式に際しては、新婦が多くのウロスをうけとる。おくり手は、すべて hula-hula の成員である。また、両親や父方の兄弟、あるいは彼女の兄弟と述べたが、正確には、母親から、あるいは父方の兄弟の妻達から彼女におくられる。ウロスは、女から女に伝えられるものである。

両親が死んだとき、その財産は子供にゆずられる。土地や家や木などの財産は、主として男系で相続される（現在では性に区別なく均分相続しているという）が、ウロスは直系の女、すなわち婚出していた娘達にゆずられる。

ウロスは女によって生産され、女によって女に伝えられてゆくものである。

## VI. おわりに

本稿では、まずウロスの色は赤と黒と白の3色が基本であることを述べ、そのつくり方を概観した。ついで、北タパヌリ郡で用いられているウロスの種類についてふれ、特に raja ni ulos についてのべた。そして用い方の項では、参列者のウロスの着用に着目して親族の親密さの程度をみようとした。結果としては、ompung, saompu が重要であり、saompu が親族の中核集団であるのではないかと想像させる。また、hula-hula は、自己の氏族の親族と同等の重要性をもっているのに対して、boru に対しては、きわめて低いあつかいをしていることがここにも明瞭にみられた。

また、ウロスの贈与の項では、父系のきびしい社会の裏に母系でつながる系があり、ウロスは、その母系の象徴的なも

のとして登場してくることを述べた。

しかし、ここではまだふれていないことがある。ウロスはもう一つの別の意味がある。すなわち、hula-hula が boru におくる贈物の総称をやはりウロス<sup>2)</sup>という。あるいはウロスウロス (ulos-ulos) という。[VERGOUWEN, 1964: p. 58-60]。この意味でのウロスを筆者はとてもあつかえるだけの資料はもちあわせていない。しかし、ウロスとよばれる贈物の中心は布としてのウロスである。その点では少しは、贈与についてはふれたことになる。

また、ウロスは単なる布ではない。gobar とよばれる模様のない白布もバタック族の布ではあるが、これは夜の外出や夜衣としての実用上の意味はない。それに対してウロスは単に模様があるということではなく、ウロスには、sahala とよばれる霊がついている。sahala は人の tonji (活力) を高め、生き生きする力をあたえる力をもっている。ウロスがおくられるということは、この sahala をおくられることである。そのため、婚入した娘や生れてまもない危険な状態にある赤坊、あるいは旅にでる人にウロスがおくられる。

ウロスが父系社会の裏側で、母系の上によって sahala が移動し、より強力にその社会を維持しているのである。

しかし、この sahala は今や死にたえようとしている。そして霊力のあるウロスは、財産としてのウロスに変化しようとしている。専業の織屋が出現し、専業の織姫が生れている。ウロスは売買される商品としての位置を高めている。しか

2) 反対に boru から hula-hula におくる贈物の総称はピソ (あるいはピソピソ: ナイフの意) とよばれる [VERGOUWEN 1964: p. 61-63] ただし、実際にナイフがおくられるのではなく、お金である場合が多い。

し、ウロスの価値は、おみやげ品以外では、バタック社会においてしか価値のないものである。あまりの *sahala* の下落は、ウロスそのものさえなくさせてしまう。とはいえ、ウロスは、形を変えながらバタック族のなかに根強く生きてゆくようにみとれた。

## 文 献

- Burkill, M. A., 1966, *A Dictionary of the Economic Products of the Malay Peninsula*, Governments of Malaysia and Singapor, Kuala Lumpur.
- 清野謙次, 1943, 『スマトラ研究』河出書房。
- 後藤捷一, 1975, 「含藍植物の種類」『染織と生活』No. 10. 染織と生活社。
- Harley H. Bartlett, 1928, "Color Nomenclature in Batak and Malay", *Pap. Michigan Acad. Sci. Arts and Letters. Ann. Arbor. Vol. 10*,
- Heyne, K., 1950, *Nuttige Planten van Indonesië*, H. Veenman en Zonen, Wegenengen, Bandung.
- Singaribun, M., 1975, *Kinship, Descent and Alliance among the Karo Batak*, Univ. of California Press, Berkeley.
- 吉田集而, 1973, 「スマトラ・トバ・バタック族の住居空間の分割」『住まいの原型Ⅱ』鹿島研究所出版会。
- , 1976, 「トバ・バタック族の親族呼称について」『国立民族学博物館報告』第1巻第3号, 国立民族学博物館。
- Vergouwen, J. C., 1964, *The Social Organisation and Customary Law of the Toba-Batak of Northern Sumatra*, (Translated by J. Scott-Kemball), Martinus Nijhoff, Hague.
- Warneck, J., 1906, *Toba-Bataksch-Duetsches Wörterbuch*, Landsdrukkrij, Batavia.